



Title	B・H・チェンバレンの日本観
Author(s)	熊谷, 忠泰; 増田, 史郎亮
Citation	教育科学研究報告, 8, pp.9-19; 1961
Issue Date	1961-12-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/31794">http://hdl.handle.net/10069/31794</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-01-19T10:51:27Z

# B・H・チェンバレンの日本観

熊谷忠泰

増田史郎亮

## 1. チェンバレンの学問の性格

チェンバレンの日本観を明らかにしようとするに際して、まずその立論の基礎、つまり彼の学問の性格を一考しておくことは、必ずしも無意味ではないであろう。特に彼のようにその学問的領域が多方面にわたり、多彩な活躍を展開した人には、これはむしろ必要ですらあると思う。

1877（明治10）年の「枕詞及びいひかけ考」（On the Use of "pillow-words" and plays upon words in Japanese poetry.）にはじまる彼の著書・論文は、その生涯を通じて、無慮70篇の夥しい数に達するのが①、いまそれを著書、論文、翻訳に大別して示すと、次のようになる。

著書 16冊（22・85%）

論文 42篇（60・00%）

翻訳 12篇（17・15%）

また、内容別に分類すると、次の通りである。

日本案内	2	（2・85%）	
日本語読本	3	（4・28%）	
宗 教	1	（1・43%）	
英 文 法	2	（2・85%）	
日本文学	18	（25・71%）	} 52（74・28%）
日本文法関係	6	（8・57%）	
アイヌ研究	6	（8・57%）	
琉球研究	9	（12・86%）	
言語学	9	（12・86%）	
考古学	4	（5・71%）	
その他（含随筆）	10	（14・28%）	

このような素朴な分析から直に結論を出すことは危険であろうが、一応の考察のみは述べておかななくてはなるまい。

第1の分析の意図は、彼の全労作のなかに占める翻訳の比重が、他の外国人と比べて可成り大きいことを示そうとしたものである。そしてこのことはまた、彼が日本及び日本語に関する正確な認識と知識とを持っていたということを物語る。即ち翻訳は単に文字の書直しではない

のであって、何を翻訳するかが、まずそれに先行する基本的条件であり、それは翻訳者の対象に対する本質理解の程度を客観的に示すパラメータでもある。このような基本的条件を確実におさえ、その理解を通しての発言ならば、それに対して十分の評価を与えてもよい。批判は、単なる主観的感情や一方的臆測であってはならないからである。

このような観点から彼の翻訳の意義を考えるならば、よく云われる「紹介者」の評価も、文字通りには理解されないことになるであろう。それは皮相な「手から手へ」式のそれではなく、言葉の真の意味における「本質」の紹介と云わなくてはならないからである。しかも彼の場合は、自分の主観的理解を通じた説話的な紹介や紀行的な紹介、また特にハーンに見られる文学的な紹介とは異り、日本の古俗・慣習がそこに現に生きて動いている言葉の翻訳を通じての紹介であった点に特色が見られる。「言の葉」は、日本では、「言魂」の表現と見られていたからである。

さて、何を以て彼の翻訳が日本紹介の本質を衝き、また基本的条件をおさえていたのかは、第2の分析が示している。彼の全労作を内容的に見ると、言語学的立場に立っての日本語の研究にあったと見てよい。しかも注目すべき点は、日本語を単に言葉としてだけでなく、さらにそれを古代日本人の生活理想や生活感情の表現として捉え、考古学、古俗分析、比較民族学的立場から、厳密な言語学的地盤から理解しようとしたところにある。このような科学的操作と研究の上に立って、古事記、万葉集をはじめ、多くの日本古典が翻訳されたことを理解しなくてはならない。

チェンバレンの日本観は、端的に云って、このような視点と操作に基づいて導出されている。従って、それは科学的であり、言語学的であって、少くとも瞑想的、哲学的ではない。反面、強い説得力を持ちながらも、ともすると古代へ還り、解釈学的な傾向をもっている。だから、日本人をその祖先の世界にいざない、そこから日本人の精神生活への反省と理解とを与えてくれるが、歴史を創造し、世界に伸びようとする人々に対して直接の示唆を与えるというようなことは稀である。

しかしこれはあくまでも現代人の感覚から云われることであって、そうは云っても、このことから直に彼の価値が削減されるものではない。彼には既に厳とした歴史的評価がある。われわれはその評価に即しながら、また虚心に彼の業績を探究すべきであろう。

## 2. チェンバレンの日本観

### (1) 日本社会の構造に対する観察

彼にとって、日本社会の構造に最も重要な位置を占めるものは天皇であった。天皇は、単に日本社会階層のなかで最高の地位を占めるだけでなく、祭事、政治、法の渊源であり、従って天皇による絶対主義的政治、それに対応する臣民の絶対随順が、行政機構の源泉をなしていると考えられた。こうした政治・行政の構造は、とりもなおさず日本社会の構造を規制し、ひるがえってそれがまた国民の天皇・権威に対する態度を規定する。このような天皇に対する態度は、西欧における皇帝・王に対するそれとはやゝ異なるものがあって、それは一言に尊崇の態度

と云うべきであろう。

しかし、他面、歴史の跡から省ると、天皇が、自ら政治にたずさわった時期は必ずしも長くなく、多くは野心的な実力者によって実際政治が行なわれてきた。彼はこうした史実に即して、明治維新も単に実力者の交替にすぎないと指摘する。

1889年の憲法制定に引続く二院制議会の発足以来、一応国民議会在が標榜されはしたが、しかし実際に政治に参加したものは、全国民中僅か2パーセントを占める華族・有産紳士層に過ぎなかった。しかも、前述のような権威主義的な社会構造を具えたこの国に於て、官吏の権力は絶大なるものがあり、またその人口の比重も大きく、その圧力下に中央集権的プロイセン流の政治機構が確立されようとしている。しかし、政治の実権者と官僚組織とは必ずしも一体的なものではないから、そこには常に政治団体の対立、離合が見られ、その結果、行政的変更が屢々起る。彼は、このような変転極りない官僚的寡頭政治こそ、日本政治の特色だと考えた。

しかし、一方ではまた維新秩序の安定と、それに伴う復古的傾向との合流は、ここに新華族令による旧大名層の抬頭とその貴族化とを招来して、これがまた藩閥官僚層に対して新たなる影響を与えようとしている。しかし、全体的に見て、大多数を占める国民大衆は、権威に対する依存度が大きく、また彼ら自らの力によっては殆ど何事もなし得ないので、実力者にとっては極めて御し易いという性格を具備していると云える。

以上のような父権的・権威主義的な社会構造の下にあって、軍隊は、彼にとって、一見矛盾的性格を持つものと見られた。それは、指揮官と兵卒との間に見られる親密性、卒直性、いわば戦友的感情の濃厚さに注目した所から、彼において、それが単に権威的結合に終らず、民主的組織にまで昇華されたことによろうが、しかし、その後の彼の目には、このような初期の民主的軍隊組織も次第に変貌を遂げるものとして写る。即ち軍事的勝利による日本の軍国主義化は、漸次、軍隊を戦争に勝つことを唯一の目的とする組織に改め、政府は一貫して軍人精神の向上と組織の整備とに努力し、その結果、普通教育においても、軍歌が公然の教科となり、また軍人精神が教科内容に加えられるようになって、国家の軍隊化が実現されようとする。

父権的・権威主義的・権威維持的な社会構造は、いきおい日本の家族構造をも規定する。家族組織において天皇の権威を象徴する者は戸主であり、彼は祖先の霊の代理として家族に臨む。養子制度は、単に父権の維持というばかりでなく、家系・家名の絶滅を防ぎ、祖先の祭事を長く行うために採られた社会の制度である。従って、結婚は、人格的なものというより、家本位の行事として、西欧とは異った意味で重視される。しかし、この行事に関しては、女性は如何なる発言権をも持たず、花嫁教育では、依然として儒教的三従の教訓が強制的に行われる。日本女性の理想は、賢く、強くはあるが、権威・家に対しては絶対服従を要求されたスパルタ的心情の持主たることに在った。

このような家族構造においては、孝こそが最高の徳であり、子どもが両親の犠牲となることは常に当然であるとされ、若し両親をすてて顧みない子どもは、単に不道德であるばかりでなく、社会的にも失格者たる汚名を甘受しなければならなかった。そして、このような孝の倫理

が、国家的規模では忠と結合するところに日本社会構造の特色があると云わなくてはならない。忠と孝—日本社会は、この経緯によって基本的骨格を作っていたのであり、そこに西欧とは異なる家族の社会的意義が見出される。

ところで、このような精神構造を支えている現実の経済構造はどうであったか。チェンバレンによれば、国民の大部分を占める階層は農民であり、また日本農村に於ては大土地所有の現象は見出し難く、従って、農民層の過半は家族労働を基盤とする自作農、または小作農であって、生活は一般に低級であり、そのためか進取の気概に乏しく、多くは現状維持、保守的な傾向にあった。もっとも、明治後半期になると、中国市場を近くにひかえて、工業方面の躍進も予想される。唯、貿易商人のなかには、契約、会合の規則正しさに欠ける者もないわけではないが、新しい世代のなかには、少数とは云え、熱意をもって使命に邁進しようとする者も見られるので、その将来には明るいものがある②。

## (2) 国民性に対する観察

日本人は、本来、気質的に見て非敬虔的な民族であると見られている。それは、日本の古代神道における「かみ」が、欧米人の考えるデイティ・ゴッドに一見相似たように見えて、実は全く異なるものであるということに由るようである。彼によれば、日本人は「かみ」に対する畏敬の念を持たず、また善神・悪神の区別もないようであり、殊に日本最古の民族的伝承と云われる『古事記』に、宗教関係の歌が一首も見出されないと云うのも、それを物語るという③。しかし、'そうであるからと云って、日本人が直に不道德的であり、無宗教的だと云うのではない。日本人にとって、宗教と倫理、信仰と行動とは、一般に分離可能なものと考えられ、西歐的な意味での両者の内的緊密性は見られない。従って、いわゆる非敬虔的、または非宗教的という言葉は、西歐的思惟の次元から、一般論として考え得るものではなく、むしろそうした事実のなかに、彼ら独自の精神的体験にもとづく宗教性があると見なければならぬ④。

維新以来、万般の世事の革新とともに、日本の権力者たちは、天皇崇拝、忠孝一本、愛国、忠義という、必要に応じて発明した「新しい宗教」的教義を国民に教え続けて来た。従って、日本の新しい宗教は、自然発生的な宗教ではなく、新たに官僚によって創造された宗教である⑤。このような新しい国民的宗教の出現こそは、不断に日本人を追い込んでいた諸列強に対する劣等感と、その劣等感ゆえに一刻も早く世界の強国として雄飛しようとする精神的焦慮の産物であると云えないこともない。日本の官僚は、実に巧妙にこの新宗教を利用することによって自国の劣勢を隠蔽し、またそうすることによって急速に国力増進に役立てたのである。こうして、天皇崇拝の新宗教は、日本を、あの東洋的無気力から離脱せしめただけでなく、さらに世界列強の一とさせた挺子そのものであったのである⑥。

愛国心と云えば、彼は特に1887（明治20）年前後を境として起った日本主義運動の勃興に注目した。日本は、この頃を転機として、文字通り洋風排斥、宗教・思想の日本化を企図し、さらにはまた自らアジアの指導国たらしとする気宇に溢れた。日本が次第に軍国主義化の方向を採りはじめたのも、決して、これと無関係な出来事ではなかった。しかし、後進国日本が、諸

列強の対立激しい中であって、その競争場裡に自立し、遅れた近代化を完遂するには、この方式もまた止むを得ないことであつたと彼は見る⑦。

彼によれば、日本人の国民性の長所は、記憶力あり、商才もまた乏しくなく；さらに天皇に対する忠誠心・国家への愛に強く、生来清潔を好んで美を解し、巧に他の長を模倣する点にあるが、他面、高度の知的業績に乏しく、形而上学的思惟に対する関心が薄く、従つて抽象的能力に欠けるほか、その思惟様式は非合理的・非科学的であつて、虚礼を尊び、事大主義的である点に欠陥があるという⑧。

### (3) 日本の文化様式に対する観察

チェンバレンは、外国文化との接触の間に、日本文化が如何に変化していったかを、大よそ次のように見ている。

英訳『古事記』序文にも見られるように、彼は大陸文化渡来以前の日本古代文化のなかに、中国文化とは明らかに異なる一つの文化の型があつたことを指摘する。たとえば、国民の生活様式はいわば単純であり、従つてその衣食住の程度は低いが、それにも拘らず、近親婚が忌まれず、婿取りの風習もなく、また大洪水伝説や輪廻転生説などを持たない素朴な文化の型を作り上げていた。ところが、養子の制度や黥刑の制などは、その後中国から渡来したものであらうと考えた⑨。

このように、本来それ自身の固有の文化をもつていた古代日本は、まず大陸文化との接触によって、中国型の文化、印度仏教の影響を受けて大きく変容していく。しかもこの文化の変容は、更にイスパニヤ、ポルトガルなど、所謂南蛮文化の渡来によって促進されていく。彼等はこれらの文化によって、新しい西欧の技術、特に戦争技術とキリスト教という未知の宗教とを学んだ。ついで彼等は、長崎の出島を導入口としてオランダ文化を吸収し、西欧の実学と、その実学精神に接触する。科学が、学問として、多少なりとも日本に輸入されるに至つたのは、実にこのことに由つてであつた。

最後に、そして現にいま進行中であるところの明治期の欧化・文明政策が挙げられる。これの最終的評価は、なお歴史の未来にあるわけであるが、目下の段階に於てすら、日本人の知性、それに基づく社会的活動力は、この運動によって大いに高まって来ている。多くの人々は、日本人の欧化を、単に表面的なもの、従つて皮相的だとし、そしてこのような結果を、日本人の模倣的能力によるものだと過少評価をする傾向があるが、少くともこういう考え方は、日本人の伝統的な外来文化受容能力の偉大さを知らず、また日本民族に関する知識の浅薄さに由るものと云わなくてはならない。しかし、そうは云つても、あの日本主義唱導の時期以来、日本の外来文化受容の態度には、大きな転換が行われ、万事は「日本のための日本」という考えの下に、思想・学問・文化その他すべてにわたつて、日本化運動が行われるようになった。このことについては既に触れたので詳細は略すが、とに角、新しい日本文化の形成、または外国文化との接触による、就中明治期における欧化政策による日本文化のめざましい近代化に関して、彼が常に讚美的であつた事は注目すべきことであらう⑩。

次に日本文化の個々に関する彼の観察を概観しよう。

(イ) 言語 この方面の研究は、文字通り彼の独壇場であって、多くの貴重な見解が発表されている。就中琉球語、アイヌ語の研究を通して日本語の基礎系統を明かにした点は、不滅のものであろう。アイヌ語に関する彼の研究の結論は、それが日本語と多くの共通点を持っているにも拘らず、結局は両語間には同一系統に属すると断定するだけの親近性を持たないというものであるが<sup>⑩</sup>、琉球語に関しては、音韻組織上彼の意見は多少訂正さるべきところもあるが、既に早く日琉同祖論を唱えた尚象賢の説を言語学的に立証するだけの成果をあげている<sup>⑪</sup>。今日では、琉球語が日本語の一方言だということは、既に一般的常識となっているが、彼がこのことを明らかにした『琉球文典』及び『日・琉両語比較論』が出たころ(1895年)は、確かに画期的な労作として世間を驚ろかせたことであろう<sup>⑫</sup>。

なお、彼は日本語には古典語、和漢混淆語、口語の三つの異った用法をもつものがあるとし<sup>⑬</sup>、正確に学ぶには日本語は最も困難な言語であると考えた<sup>⑭</sup>。

さらに、彼の『日本小文典』は、明治20年に発表されたものであるが、従来の文語文法一本の仕来りを破り、英文法の組織によって日本口語文法を説く範を示したものとして、その後の日本国語学の進展に大きな寄与をなしたものである。これは、単語法と文章法との2部から構成され、前者に於て、働かない辞(名詞、代名詞、副詞、接続詞、数詞、関係詞)と働く辞(動詞、形容詞)が説かれ、後者では、文の構成と音韻とが述べられている<sup>⑮</sup>。特に音韻研究は、従来の国語学では全く見ることの出来ないものとして、高く評価されている<sup>⑯</sup>。

(ロ) 宗教 日本民族が宗教に関して極めて淡泊であるということについては、既に述べたとおりであるが、さらに彼によれば、異なる宗教、たとえば神道と仏教に関して、日本人は特に寛容であって、両者を異るものと認めながらも対立せしめることなく混合的に信仰していると見ている。

日本古来の宗教である神道は、古代における自然崇拜と祖先尊崇との混合に発したものと見られ、従って神道における「かみ」は、また祖先の「上」にも通ずる性格を内包し、それゆえに風、大洋、火、山、河川などやおよぼす人格的な男・女神としてえがかれている。しかし信仰におけるこの自然崇拜の側面は、近代ヨーロッパの思想的洗礼を受けて、今や徐々に消失しつつあるという。これに対して、仏教は、中国・朝鮮を経て輸入された印度古来の宗教であったのであるが、奈良時代以後広く国民層に滲透し、現在では既に国民宗教として完全に日本化されており、日本民族の最も深い精神生活に融合して、思想、芸術、建築、文学をはじめ、日常生活に至るまで広く人心の支えとなっている<sup>⑰</sup>。

以上に比べてキリスト教は、日本に於ては最も新しく、また民族的な信仰感情も異にする西欧に発達したいわば異端の宗教として迎えられたため、その布教の過程は迫害の歴史として展開されてきた。1587年、秀吉の禁教令に発したキリスト教受難史は、二六聖人の処刑、家光の鎖国令、島原の乱、そして1865年の浦上かくれクリシタンの発見に至るまで、たとえそれが「侵略」という誤解に基づくものであったとは云え、幾多凄惨な事実彩られている。しかし信仰

の自由を取戻した現在ではカソリックを始めプロテスタント、ロシア正教など、13万以上の信徒を有し、私立学校経営を通して、日本近代化の上に大きな貢献をなしつつある⑩。

(ハ) 芸術 まず、絵画に関しては、5世紀後半頃帰化人によってその技法が伝えられたがこれから9世紀半までが、日本絵画史における第1期、または創業期と呼ばれる。しかし、日本絵画が真の芸術的洗練性を見せ、同時に独自の画法を創造し始めたのは、これ以後の第2期に属する。所謂、大和派、土佐派の出現がそれである。第3期に入ると、中世日本のメヂチ家とも云うべき足利氏の保護を受けて、日本絵画は大いに振るい、雪舟、狩野元信など、優れた画家が輩出した。第4期は四条派の円山応挙に始まり、その後興味溢れる浮世絵なども産み出されて、独特の構想と色彩感に充ちた品作をもって、世に喧伝されるようになった。

反面、彫刻の歴史は、絵画の歴史ほどよく知られていない。むろん彫刻の場合も、絵画と異ならず、輸入以来仏教的な背景のもとにその歩みを進めて来たと見てよいであろう⑪。

(ニ) 文学 外国人の日本文化に対する一つの偏見一模式的性格の指摘一は、日本詩歌によって完全に否定される。それは、文字通り日本民族の独創性をあらゆる産物の一つと云わなくてはならないからである。中国やヘブライの詩型に見られるような、複雑な規則は日本の作詩法の与り知らぬことであって、韻・アクセント・対句法などを必ずしも顧慮しないし、五・七のシラブルを交互に用いるほかは、本質的な規則はないとさえ考えられる。しかし、枕詞・序詞などは、日本詩歌の本質的な部分ではないとしても、日本詩型の独特なところとして無視するわけにはいかない。日本詩歌の特色は、このように、その簡潔性、先例尊重、表現の優雅性にあると見なければならぬ⑫。

(ホ) 教育 チェンバレンが生活した明治期の日本は、教育の面だけでなく、すべての面において国家主義の形成期であったので、彼が、後年日本を回想してものした『新宗教の創造』(The invention of a New religion, 1912)において、当時の日本教学の指導原理が徹底的な天皇崇拜に一貫されていたとしたのも決して偶然ではないであろう⑬。

彼によれば、厳密な意味での日本の教育は、中世の寺院教育に発するとされている。むろんこれがただちに寺子屋教育をさすものでないことは、仏典による僧侶の寺院での教育という点から明らかである。しかし近世に入ると、教師としての地位は、漸次儒者にとって代られるようになる。そして次第に幕末に降るにつれて、若干の熱心な学徒たちによって、自発的に、しかし非常に多くの苦心と犠牲と秘密の裡にオランダ語の学習が行われるようになったという⑭。しかし、本格的な近代式教育諸制度の変革は、主としてアメリカの指導の下に、1868年以後に行われた。現在、日本の学校組織は、東京・京都二帝国大学をはじめ、男・女高等師範学校以下、高・専、中等・初等学校から私立学校に至るまで、全く欧米先進諸国に劣らないだけの規模を持つようになっている⑮。

しかし日本の教育において注目すべき点は、学生の優秀さと外国語学習の異常なまでの熱心さである。彼は日本の学生を、教師を最もよこばすだけの冷静さ、知的優秀性、個性的で且つ勤勉さを具備した青年層に属すると評している。そしてこのように優れた学生たちによっ



て、諸外国の新知識が、外国語学習の異常な熱心さを通して獲得されていくところに、洋々たる日本の将来が約束されていると見たのである。しかし同時に、彼は日本人にとって外国語学習は極めて困難なものであることも指摘する。両国語間における用法の懸隔が極めて大きいため、そこには非常な苦心とともに、学習者の勇気と決断と努力とが要求されるという。にも拘らずこれらの悪条件を克服しつつある日本の学生を彼は高く評価するのであるが、唯彼等が遂には国家の官吏たらんとする点だけは不可解であるとしているのは、傾聴すべき教訓であろう④。

### 3. チェンバレンの意義

85年という長い生涯を通じて、彼の活動は大よそ4期に分けて考察することが出来る。

第1期 1877年(27才)～1881年(31才)

第2期 1883年(33才)～1890年(40才)

第3期 1891年(41才)～1898年(48才)

第4期 1899年(49才)～1911年(61才)

第1期は、海軍兵学寮教師時代(1874年～1882年)の大部分を占める時期で、研究面では和歌・狂言の研究を翻訳の時代と見てよいであろう。ところが、この時期から次の時期に移る間に、当時の彼としては全く珍しいブランクの年がある。そしてこの年に海軍兵学寮を辞しているが、これはこの年、彼が全精力を『英訳古事記』の完成に注いだことによると考えられる。そして、第2期の幕は、この古事記の出版を以てあけるのである。

このようにして、第2期は、前期の研究を基礎にして、日本文法・日本語研究のためのアイヌ語の研究に焦点が移る。むろん日本古典の翻訳は前期に引続き、同程度の分量において行われているが、古事記出版や宣長研究から知られるように、この期は専ら日本古事及び文法研究に重点がおかれたように見受けられる。このことは、彼が文部省から東京大学に入り、外国人であって初めて日本博言学の教師に任命(1887年～1890年)されたこととも幾分かの関係があるだろう。そしてこの頃、即ち1886年から88年にいたる3年間は、併行して行われたアイヌ研究とともに、彼の全生涯を通じて最も多くの労作の発表された時期でもあった。

これに引かえ、第3期はまず琉球語研究一本にしぼられたことは、これに関する9篇の論文を除けば、他に『日本旅行案内』と「日本宗教行事考」とがあるだけであるということから明白であろう。この第3期における研究の転換が、日本古代語に関する比較言語学的研究にあったことはいうまでもないが、それに関して、この研究に先立つ1890年には、東京大学教師の地位を去っていることは、その決意のほども知られるようであり、またこの年4月には、初めて来日したハーンを横浜埠頭に出迎えるという「出会い」があったことも見逃されてはならないことであろう④。

他の期に比して最も長い第4期は、彼としては日本に関する一応の研究も終え、自適を楽しみながらその成果を集大成するという意義を持つものであったろう。従って、この期の労作は『文字のしるべ』ほか、俳句・和歌・謡曲など最も困難な日本研究に関する著作が出されてい

るが、もはや他の期と異って、その発表も隔年、または二年おきになされており、そして最後は「ラフカディオ・ハーンの思い出」を以て日本に別れを告げている。

以上から知られるように、彼の業績は、何と云っても日本言語学の開拓にあったと云わなくてはならない。当時の一般的段階にあつては、日本語は中国語から派生したものであるというような意見が、主として在中国外国人研究者から臆面もなく発表されていたような時代に<sup>⑧</sup>、古代語の根元に迫り、その固有なものとそうでないものとを厳密にふるい分け、その後比較法という新しい方法を適用して日本言語学の基礎を作り上げた彼の功績は<sup>⑨</sup>、まことに画期的なものであったと云えよう。

維新当初は文字通り百事草創の時期であつて、日本語に関する学的な研究はほとんどなされていなかった。このような時代の直後、既に見たような彼の卓絶せる活躍によってほぼその基礎づけを完了した日本の言語学は、日清戦役後の国民運動に伴う国語国字の改良運動によって急速な発展の勢を示し、欧米の言語学や音声学などを相ついで輸入し、また言文一致文体の標準化が問題とされるようになると、新に口語文法の重要性を強調しながら、明治34、5年以後からは本格的な研究の段階に入ったが<sup>⑩</sup>、こうした研究そのものの開拓や方向づけが、既に彼によって見事になされていたこと、さらにはこうした運動の中心となった人々は、例外なしに彼の門下生（上田万年、三上参次、芳賀矢一、渡辺董之介、岡倉由三郎、佐々木信綱、和田万吉）<sup>⑪</sup>であつた事が想起されなくてはならない。

彼の業績の第二は、翻譯・論説その他による日本の海外への紹介であろう。むろん紹介というだけなら、彼の前にアストン、サトウがあり、それ自体では必ずしも高く評価され難いかも知れないが、前にも述べたように、彼の場合は単なる紹介の域をこえて、純粋なる学問研究を通じて日本古典の性格を学問的に意義づけ、その本質の発掘の過程において、それがたまたま紹介の形をとって現われたと見るべきであろう。そこからはじめて、彼の翻譯の意味がくみとられるように思われる。従つて、彼の所謂「紹介」は、単に外国人だけにとどまらず、むしろ心ある日本人に大きな衝撃を与えている。そのよい例が『英訳古事記』の総論をめぐつて、当時の代表的国学者たち（小中村清矩、黒川真頼、飯田武郷、木村正辞）と交された論争であり、そして結果したものが新国学樹立の促進であつたのである<sup>⑫</sup>。こうして、その紹介は、外国人の立場から見た日本の正しい姿を、反つて日本人に教えたという結果を招いているのである。

しかし、自らの学問研究を深めることを通して「紹介」という形を結果したというこの姿は、やはり一つの性格を露呈しないわけにはいかなかつた。研究者として日本古典を客観的にあらゆる角度から考察するという態度は、対象の刻明な分析と位置づけに大きな比重を与えるが、それを文化構造全体の中から解釈し、評価するという側面を、ともすると失うことになる。いな、むしろこのような価値づけは、彼の考究の仕方としては正統的な方法論の中には入っていなかつたのかもしれない。客観的な分析を主眼として言挙をしないということ、ここに彼の日本研究、日本紹介の特色があると同時に、一つの限界があつたのではないであろうか。

言語学者ではあったが思想家ではなかったと見られる彼の立場は、当然、彼の研究を地盤とし、その成果を引継いで日本文化の文化史的な位置づけをなす後継者を必要とする。この必要は歴史がみたくくれるであろう。そこに詳細なる具体的資料を持たないわれわれにとって、彼とハーンのあの「出会い」こそは、忘れようとしても忘れることの出来ない興味ある謎として残るのである。

本稿は、民主教育協会の援助によって行なわれた共同研究（九州大学教育学部を中心として）『維新前後における在日外人文献による明治教育史の研究＝教育の基底条件としての外国人の日本観研究＝』の一環としてなされた研究の概要報告である。なお、本研究については、活水高等学校教諭後藤馨氏から、資料の一部について援助を受けたことを附記しておく。

### 参 考 文 献

- ① 国際文化振興会編『バシル・ホール・チェンバレン先生追悼記念録』（昭和10年）（以下単に追悼録とする）巻末に、その著書、論文が掲げられている。
- ② "Things Japanese" 6th ed. 1927 P.17,309~314,279,500,410等による。
- ③ "Translation of the Ko-ji-Ki, or Records of Ancient Matters" 1883,序文
- ④ "Things Japanese", Religion P.409
- ⑤ "The invention of a New religion", 1912,P.6
- ⑥ "Things Japanese", Religion P.410~411
- ⑦ "The invention of a New religion",P.7 "Things Japanese", P.88~89
- ⑧ "Things Japanese", Japanese people, P.250~263
- ⑨ "Translation of the Ko-ji-Ki, or Records of Ancient Matters", 序文
- ⑩ "The invention of a New religion", P.7 "Things Japanese", P.88~89
- ⑪ "Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan Viewed in the Light of Aino Studies",1887
- ⑫ 大瀧政和「語調を中心とせる琉球語の研究」沖繩師範学校刊, 昭和11年
- ⑬ "Essays in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan Language" 1895. "A Comparison of the Japanese and the Luchuan Languages" 1895
- ⑭ "Suggestions for a Japanese rendering of the Psalms", 1880
- ⑮ "A Handbook for Travellers in Japan", 9th ed .1913. P.16
- ⑯ 『日本小文典』（文部省, 明治20年）
- ⑰ 保科孝一『新体国語学史』（賢文館, 昭和9年）321頁
- ⑱ "A Handbook for Travellers in Japan" P.35~37
- ⑲ "Things Japanese", Mission, P.323
- ⑳ "A Handbook for Travellers in Japan", P.56~60
- ㉑ "The Classical Poetry of the Japanese" 1880, "Japanese Poetry" 1910, "Bashō and the Japanese poetical epigram" 1902 の序文
- ㉒ "The invention of a New religion", P.9~10, "Things Japanese", P.88~89
- ㉓ "Things Japanese", P.131

- ⑳ "Things Japanese", P.132~133
- ㉑ "Things Japanese", P.134~135
- ㉒ 追悼録, 原田健氏の文, 佐々木信綱筆「小伝」
- ㉓ 追悼録, 57頁, 新村出氏文
- ㉔ "A vocabulary of the most ancient words of the Japanese language", 1889, 序文
- ㉕ 保科孝一, 上掲本, 387~8頁
- ㉖ 追悼録, 13~14頁, 長与又郎氏文
- ㉗ 追悼録, 三上参次氏文

— 36. 8. 15 受付 —